



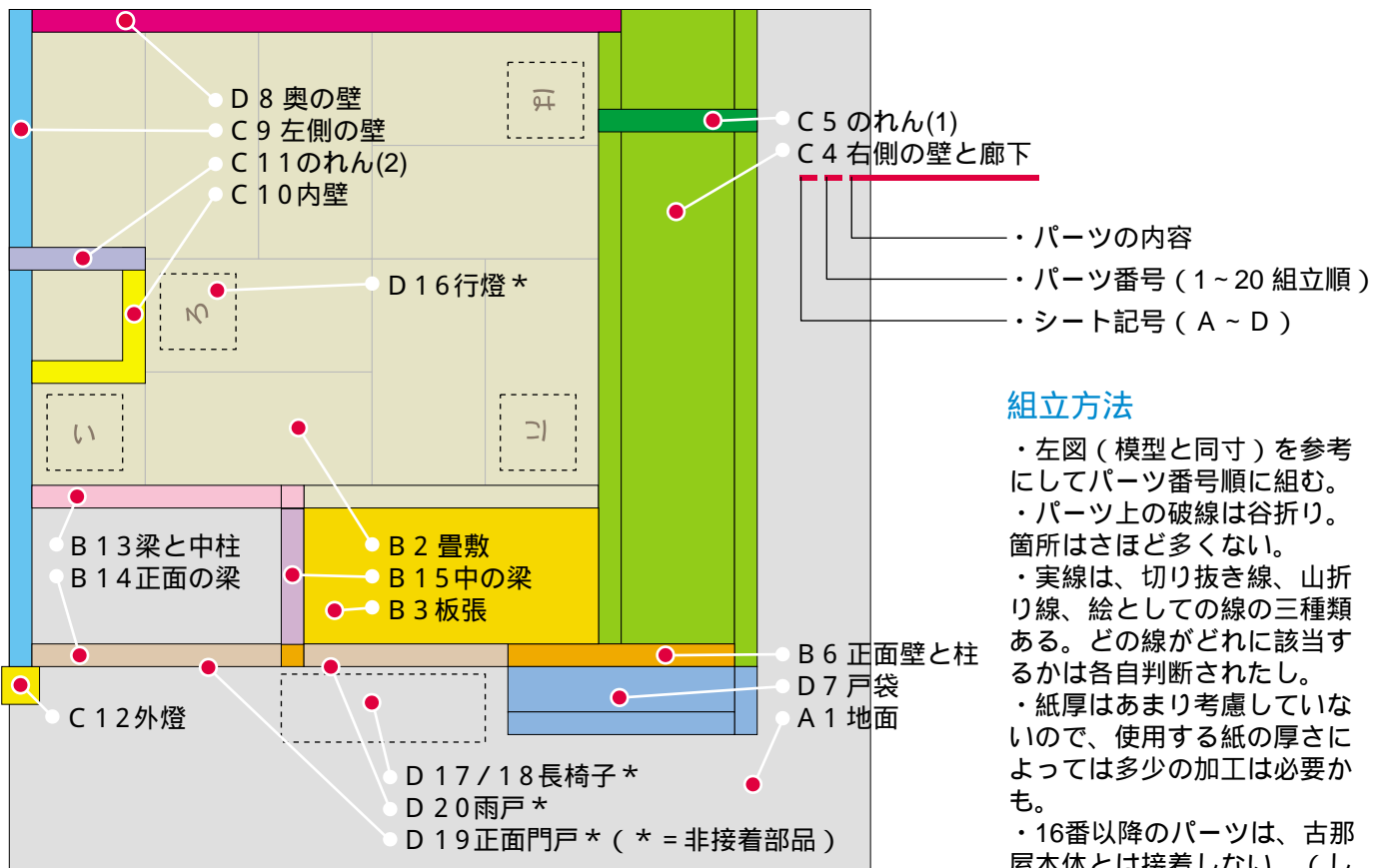
白龍亭ペーパーモデル No.1

南總里見八犬傳「古那屋」 ver.1.03

模型設計：
白龍亭主 おぱく堂主人（園部宗庵）
平成十二年四月制作 / 平成十三年二月修正

参考資料：
第四輯 第三十五回～第三十八回
本文、及び 柳川重信による初版本挿絵。
古那屋内部の挿絵四枚、外観の挿絵一枚。

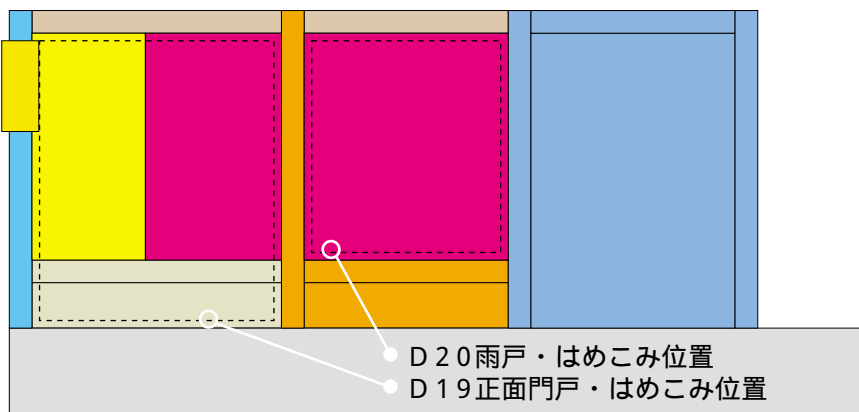
上面図



組立方法

- ・左図（模型と同寸）を参考にしてパーツ番号順に組む。
- ・パーツ上の破線は谷折り。箇所はさほど多くない。
- ・実線は、切り抜き線、山折り線、絵としての線の三種類ある。どの線がどれに該当するかは各自判断されたい。
- ・紙厚はあまり考慮していないので、使用する紙の厚さによっては多少の加工は必要かも。
- ・16番以降のパーツは、古那屋本体とは接着しない。（してもいいけど）
- ・カッター等の刃物の扱いには十分に注意すること。

正面図



行燈位置

- ・左図中の「いろはに」は初版挿絵4枚それぞれの行燈の位置。文字は「古那屋」の文字のある面の向きを示す。

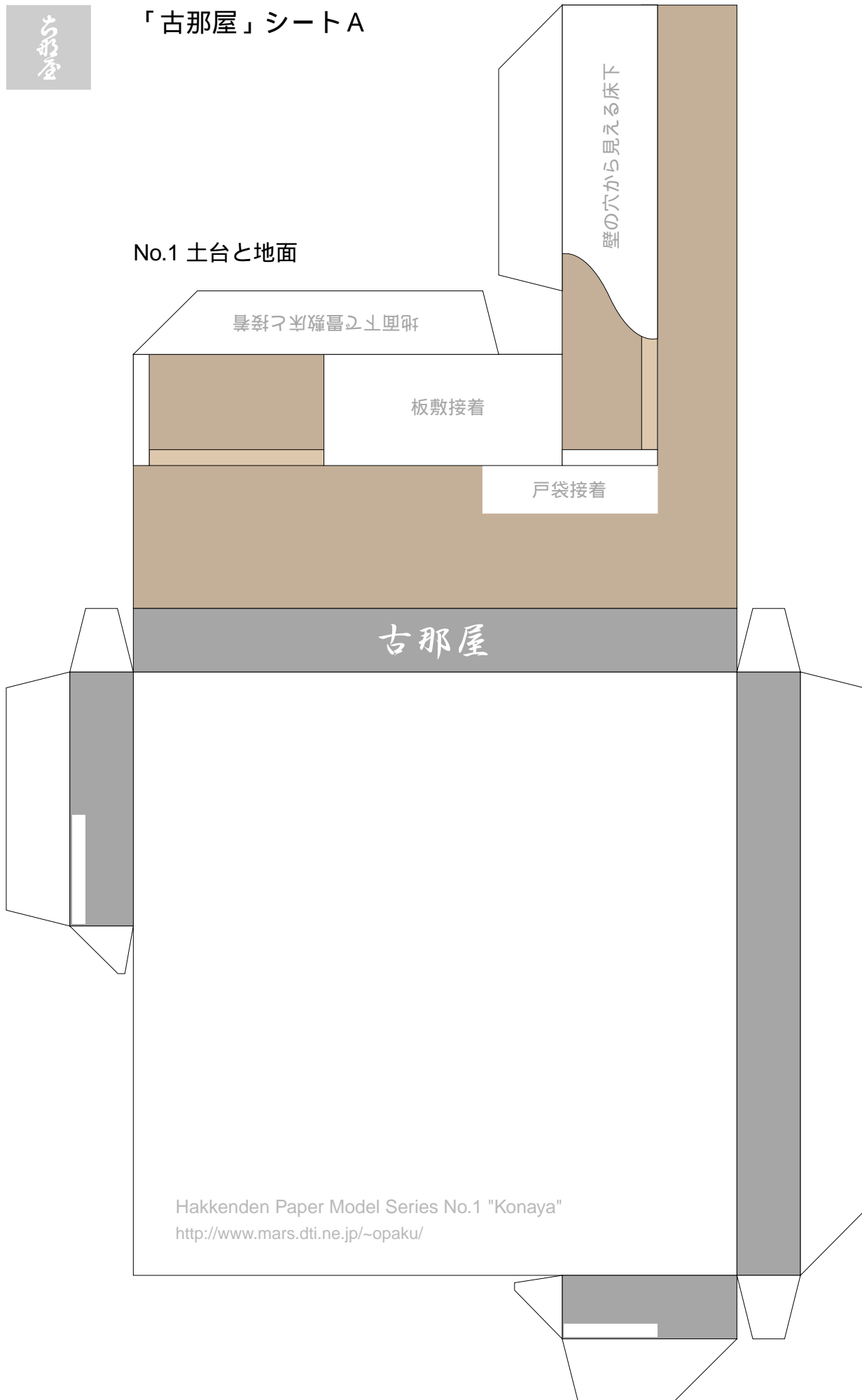
仕様

仕上寸法(mm)：
115(W) × 114(D) × 54(H)
部品点数：20
シート数：A 4 × 4 枚

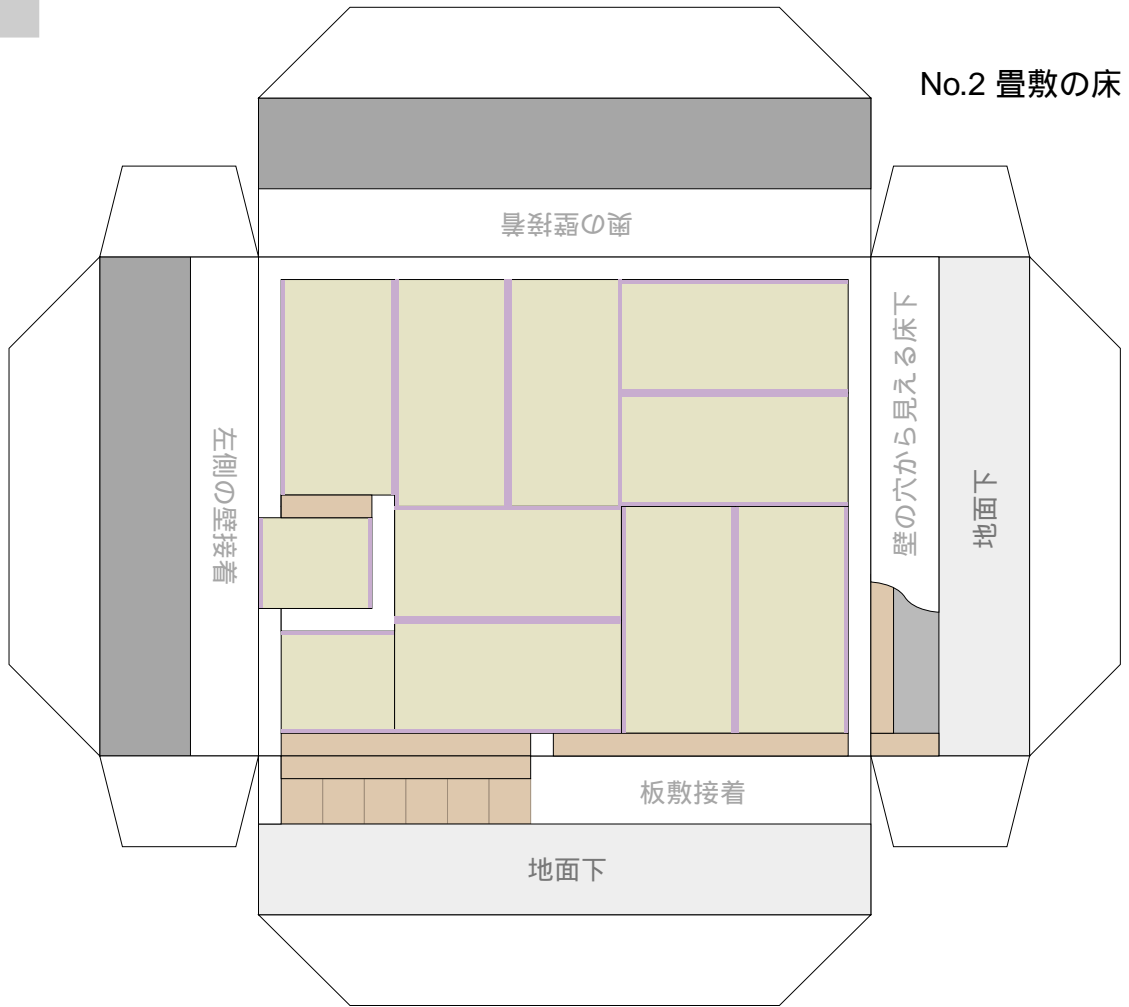


「古那屋」シートA

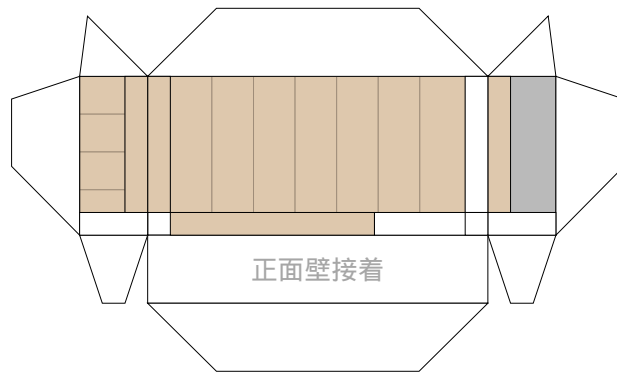
No.1 土台と地面



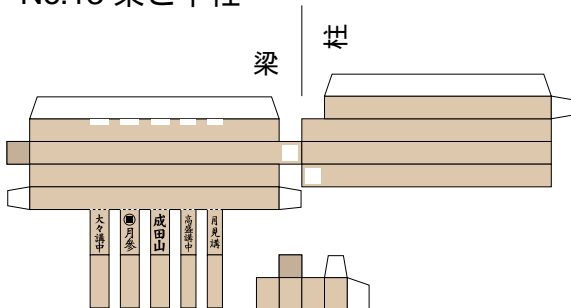
「古那屋」シートB



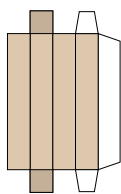
No.3 板敷



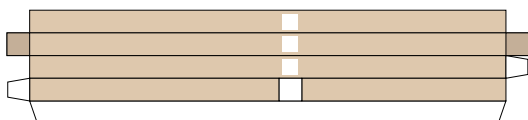
No.13 梁と中柱



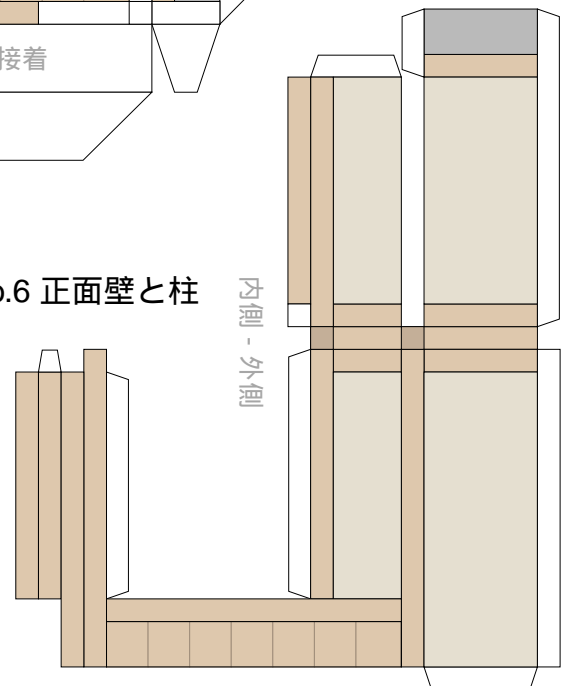
No.15 中の梁



No.14 正面の梁



No.6 正面壁と柱

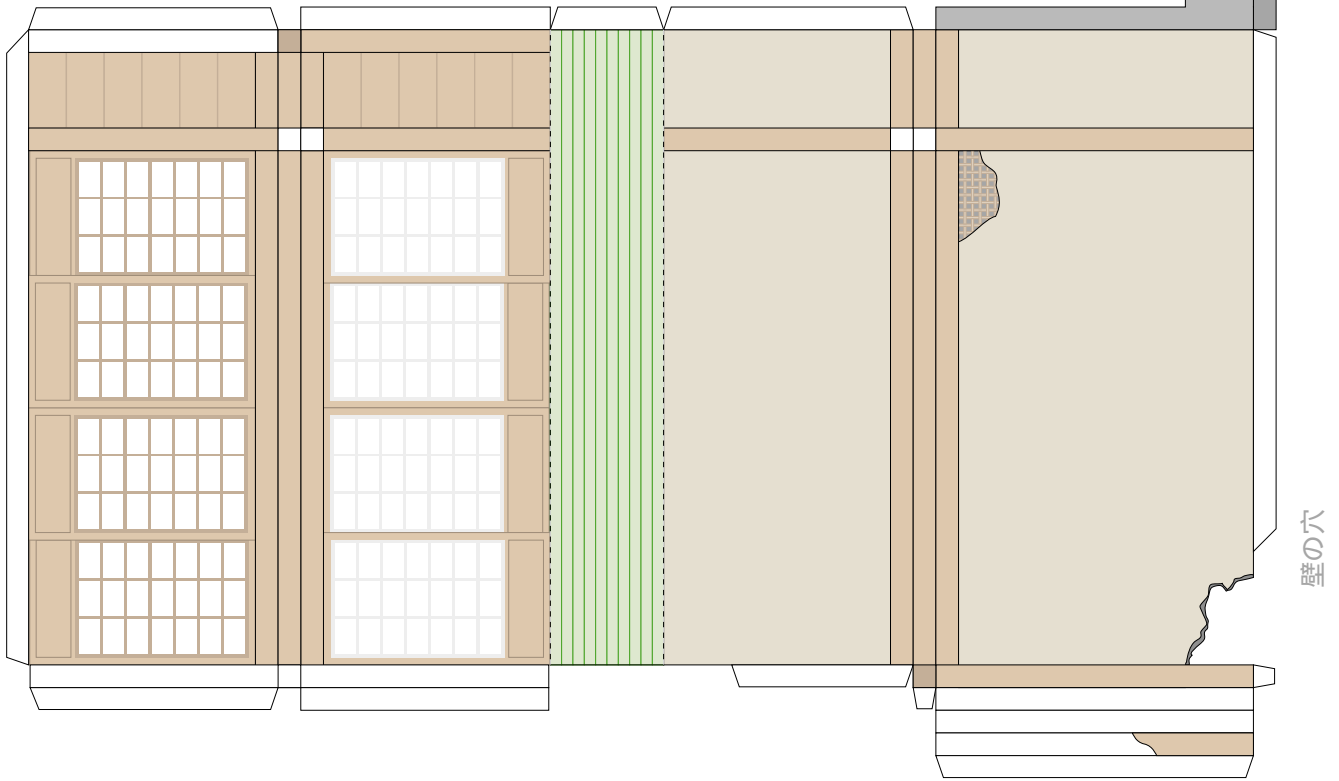


「古那屋」シートC

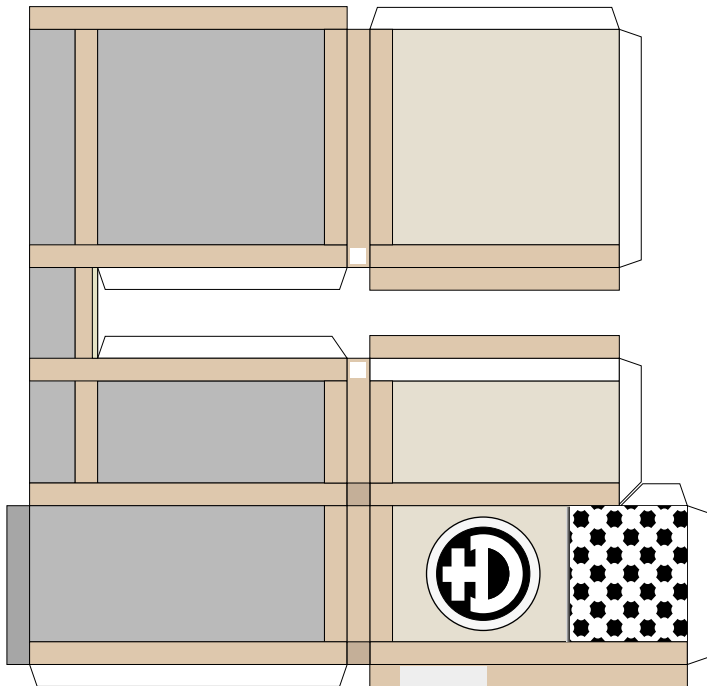
No.4 右側の壁と廊下

部屋側 - 廊下側

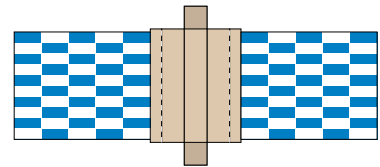
内側 - 外側



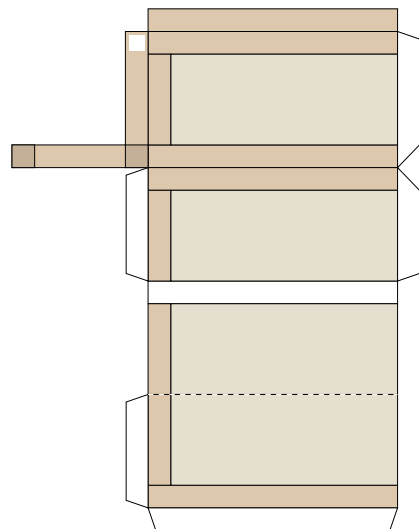
No.9 左側の壁



外側 - 内側

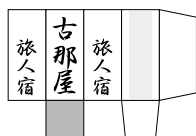


No.5 のれん(1)

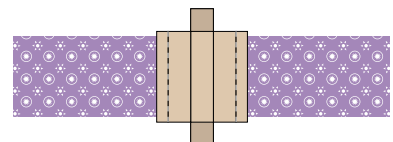


No.10 内壁

No.12 外燈

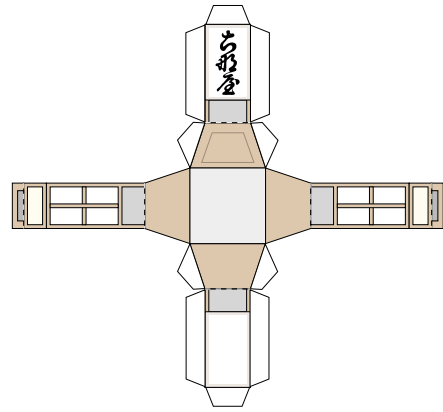


No.11 のれん(2)





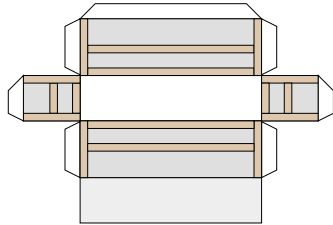
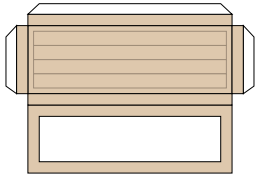
No.8 奥の壁



No.16 行燈

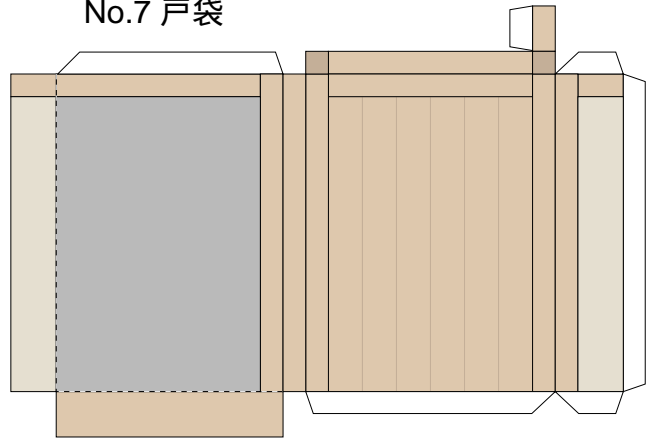
内側 - 外側

No.17 長椅子 (板)



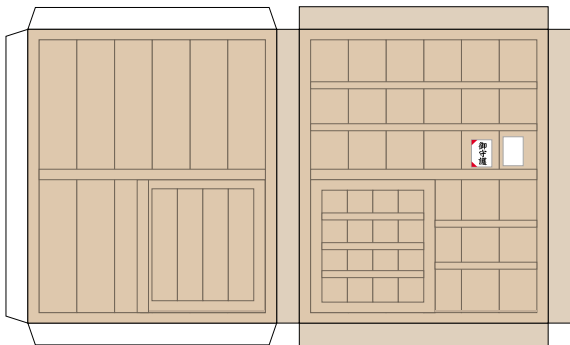
No.18 長椅子 (足)

No.7 戸袋



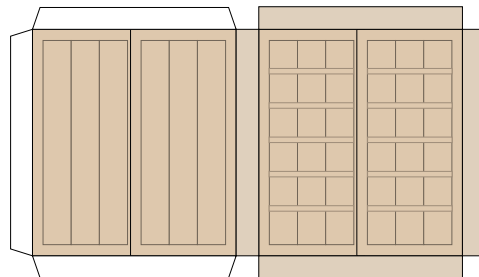
内側 - 外側

No.19 正面門戸



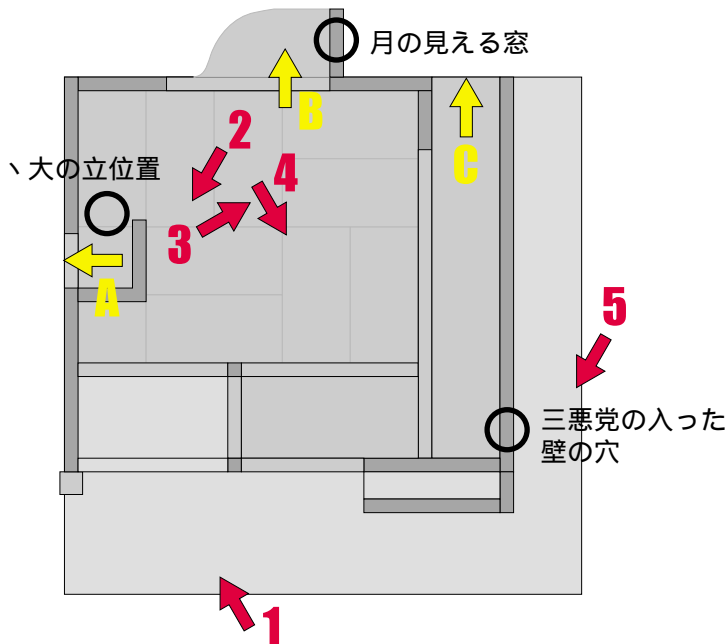
外側 - 内側

No.20 雨戸



外側 - 内側

* No.16~18は置くだけ、No.19と20ははめこむだけ。古那屋本体とは接着しない。
No.19と20を接着する場合は、B-No.14正面の梁と同時に組み込むのが作業しやすい。



柳川重信の挿絵

この模型の資料としたのは八犬伝初版の挿絵。古那屋関連は全部で五枚。すべて初代柳川重信の絵。左図中の赤い矢印が、どの方向から見た絵かを示している。

- 1・小文吾が店頭で三悪党を投げ飛ばす絵。
- 2・妹沼蘭が帰ってきて困り果てる小文吾の絵。
- 3・房八と小文吾の戦いの絵。
- 4・死にゆく房八と信乃の対面の絵。
- 5・盗み聞きした三悪党を現八が倒す絵。

それぞれの絵を細かく見れば、土間の奥が板敷か畳敷か、畳の向き、障子の棧の縦長横長など相違はある。しかし全体として見ると大きな矛盾はなく、重信が古那屋のレイアウトをはっきりと理解した上で描画していたのが分かる。当然、重信に下絵を書いて渡していた作者馬琴も明確なイメージを持っていただろう。そのおかげでこうして再現するのが可能になったわけだ。

(五枚の絵は岩波文庫版八犬伝第二巻にある)

三通路の向こう

物語の舞台となるこの部屋から別の部屋に通じるルートが3つあるのが挿絵から分かる。上図黄色い矢印がそれである。本文を読むと、信乃が寝ている小座敷、厨房、大が宿泊している離れ座敷への3ルートがある。正確な挿絵だ。

挿絵3で小文吾がBの通路を守って戦っているところからして、信乃が寝ている小座敷はこの先だと思われる。気になるのは月が見える窓だ。この方向にはC通路がある。Cの廊下の先には屋根がないということになる。この向こうはいったい何があるのか？

挿絵2でAの入口に、大法師が立っている。となるとここが離れ座敷への道か？ 雰囲気的にはこういう入口は厨房っぽい気もするのだが……。

行徳の三悪党(鹽濱の鹹四郎・板扱均太・牛根孟六)が簀子の下にもぐりこんだ壁の穴が正面から見て右側だと判断したのは、挿絵1と5の屋根(廂)の形と簀子(板敷)が右側にあるという部屋の構造による。

入口の謎

三悪党が最初に殴り込んでくる場面には「枢戸はたとおしひらき」とあるが、挿絵1には戸なんか描かれていない。では戸を描き忘れたのか？ その直前に古那屋に戻ってきた大は「店先なる簾をかかげて」とあり、戸を開けた様子はない。かといって、大と三悪党の間で戸を閉めた様子もない。戸を閉めたと書いてあるのは、三悪党を投げ飛ばした後だ。戸が一つしかないなら矛盾だが、いくつかあるなら記述に矛盾はない。だが戸が複数あるとなると古那屋の入口はどうなっているのか、よくわからない。亭主の読み込みが浅いだけかもしれない。

ぼろっちい…

この模型では破れた障子はないが、重信の挿絵を見ると障子紙がやたらと破れている。小文吾と房八の戦いで破れたのかもしれないが、三悪党が床下に忍び込める大穴が外壁に開いていることを考えると元から破れていた障子紙もかなりあったに違いない。

ボロいぞ、古那屋！

もっとも、江戸人的感覚からすれば建物なんてしばしば火事で焼けてしまうもの。穴があいたごときでいちいち修繕費用など費やしてられないのかもしれない。物語は夏だから穴でも開いていたほうが涼しいし…。

あとがき

それはさておき、この「古那屋」を組み立ててディスプレイする人なんているんだろか？ 犬士の人形でもあれば、リカちゃんハウスならぬ小文吾ちゃんハウスとしてお人形遊びに使えるんだけどね～。

* 古那屋の構造図は柳川重信の絵によるとはいえ、白龍亭主による推理部分を含んでいる。ゆえに図面を無断で著作物等に流用する事を禁ずる。無断じゃなきやいひのよん